Margaret Drabble, *The Millstone* の解釈をめぐって

八幡雅彦

たった一度の肉体関係で妊娠してしまったRosamund Staceyが，相手の男性に打ち明けることなく，生まれてきた娘を女手ひとつで育てることを決意する，*The Millstone*（1965）という作品を初めて読んだ時，筆者は，これは因襲や保守観念に捕われることなく，独立自尊の精神で，たくましく，力強く生きる女性を描いたフェミニスト小説だ，と単純に解釈した。そして，筆者が多くの読者に感想を求めた際も，今まで「学問」という象牙の塔に閉じ込もって世間知らずだったひとりの女性が，妊娠，出産という出来事を通じて，俗世間との交渉を余儀なくされ，世の中に対して目を見開くようになり，ひとりの女性として成長してゆくありさまが描かれているという感想が大半を占めていた。

しかし，筆者は，Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures*（1980）という批評に接した時，著者E. C. Rose 自身が，“my reading of the novel differs from the one that gererally prevails”[1]と述べている通り，一般的なRosamund Stacey 評とはまったく異なる解釈がなされているのを知り，ある意味では衝撃を受けた。つまり，多くの読者たちが，Rosamund を肯定的に解釈しているのに反し，E. C. Rose は，まったくといっていい程，否定的な人物として解釈しているのである。かくして，彼女の批評に接した後，筆者は，その解釈の妥当性ということに興味をいだき，改めて*The Millstons* を読み直してみた。本論文では，E. C. Roseの解釈とNancy S. Hardin，Virginia K. Beardsなどの代表的解釈を参照しながら，少しでも妥当な作品解釈を導き出すことを目的としたい。と同時に，Drabble の作品の解釈の多様性を紹介することにより，彼女は，今後もっと読まれるべき興味深い作家であることを強調したい。

なお，テキストとしては，Margaret Drabble, *The Millstone* (Harmondsworth: Penguin, 1980）を用い，和訳にあたっては，M, ドラブル『碾臼』（小野寺健訳，河出文庫，1980年）を参照にした。

この作品のヒロイン，Rosamund Staceyは，Hamishというボーイフレンドと，ホテルへ入りながらも性行為いっさいなしという奇妙な付き合いを1年続けて別れた後，Roger, Joeというふたりの男性と同時に付き合い，そしてRogerには自分とJoeが，Joeには自分とRogerが肉体関係を持っていると思わせるのだった。ところが，実際に彼女が肉体関係を持ったのは，彼らではなく，George Mathewsという別の男性だった。そして，彼女は，彼とたった一度の性交渉で妊娠してしまう。彼女が妊娠に気づいたのは，大英博物館で，Sir Walter Raleighに関する調べものをしている時のことだった。

It took me some time to realize that I was pregnant. . . . . I was sitting at my usual desk in the British Museum looking up something on Sir Walter Raleigh, when out of the blue came this sudden suspicion, which hardened instantly as ever into a certainty. I got out my diary and started feverishly checking on dates, which was difficult as I never make a note of anything, let alone of trivial things like the workings of my guts. In the end, however, after much hard memory work, I sorted it out and convinced myself that it must be so.

(*The Millstone,* pp. 33-4.)[2]

妊娠に気づいた彼女は，坐っていると，手が机の上で震え，心の中は空白となり，このショッキングな予感に30分か，あるいはそれ以上ひたっているのだった。しかし，彼女は，その直後に，この心の動揺を振り払い，再びRaleighの詩に取りかかり，最初は集中しているふりだったのが，本当に集中してきて，昼になる頃にはまさに予定通りの分量を済ませ，彼女はそのことに対して深い満足感を覚えるのだった。

. . . my mind, bent from its true obsession with what seemed at first intolerable strain, began to revert almost of its own accord to its more accustomed preoccupations, and by the end of the morning I had covered exactly as much ground as I had planned. It gave me much satisfaction, this fact. Much self-satisfaction.

(M, p. 34.)

妊娠後も学者としての仕事を続けるRosamundは，私生児を生んだからといって，学位をとり，準講師になり，講師になるという彼女の見通しが狂うなどとは決して思わなかった。

I saw no reason why my proposed career of thesis, assistant lectureship, lectureship and so on should be interrupted. (M, p. 49.)

さらに女児Octavia を出産後，彼女は私生児がひとりぐらいいようと，少しも自分の出世のじゃまにはならないという自信を持つのだった。

. . . I simply did not believe that the handicap of one small illegitimate baby would make a scrap of difference to my career.
(M, p. 112.)

そしてその通り，彼女は，論文が認められ，次の新学期から，戦後できたもっとも魅力的な大学のひとつに招かれることになり，あるペーパーバックの詩論にも，かなりの報酬で一章書くことを依頼される。かくして彼女は，近い将来，自分が博士号を与えられ，それが，私生児を持っているという異常性を張消しにしてくれるだろうと意気揚揚の気持になるのだった。

It was gratifying, too, that my name would in the near future be Dr Rosamund Stacey, a form of address which would go a long way towards obviating the anomaly of Octavia's existence .
(M, p. 155.)

以上のように，妊娠後も学問に専念をするRosamund をさして，Nancy S. Hardin が " basically a competent and self-reliant young woman scholar "[3](もとより有能で，独立独行の若き女性学者) と称賛しているのに反し，E. C. Rose は"rather chilling "[4] (むしろぞっとする) と批判している。すなわち，まったく正反対のRosamund評なのだが，ひとことで言って，

N. S. Hardinの解釈の方が妥当だろう。もしも，RosamundがOctaviaに対して，まったく無関心で，愛情を注ぐことなく，学問のみに専心するのであれば，彼女は“ rather chilling ”というべき人間だろう。しかし，彼女がOctaviaに対して限りない愛情を注いでいるということは，作品の端々から読み取れるのである。Octaviaに愛情を注ぎ，なおかつ学問に打ち込む彼女は，学者としては“ competent and self-reliant”と言ってもいいのではないだろうか。また，E. C. Roseが最初に批判しているRosamundの態度，すなわち，大英博物館で勉強中に妊娠の事実に気づき，心の動揺をごまかそうと，仕事に集中しているふりをしていたのが，そのうち本当に集中してきて，予定の仕事をやり終えたというのが彼女が“ rather chilling”であることの例だとは思えない。E. C. Roseは，妊娠というショッキングな事実を無視して，仕事に集中して，深い満足を覚えたということで，Rosamundを“ rather chilling ”と言っているのだろう。しかし，彼女は決して妊娠という事実を無視したわけではない。なぜなら，仕事を終えた直後，彼女は，これでGeorgeに会わざるを得ないだろうという満足感を覚えるからである。

And as I walked down the road to meet Lydia for lunch, I discovered another source of satisfaction : now, at least, I would be compelled to see George. I had an excuse, now, for seeing him.
(M, p. 34)

しかし，E. C. Roseは，RosamundはOctaviaを“ an extension of herself ”（自分の分身）としてしか愛しておらず，つまり真の意味ではOctaviaに対して愛情を注いでおらず，母親になることがRosamundを外部世界と結びつけることにはならないとも主張する。RosamundがOctaviaを真に愛していない理由のひとつとして，E. C. Roseは，Octaviaを養子に出すよう勧める手紙を姉BeatriceからRosamundはもらうのだが，それを拒絶して，自分で育てるのを堅く決意することを上げている。姉の手紙の一部は次の通りだ。

I must say you didn't go into many details about the whole thing, but from what you said I gathered you were intending to keep the child. I feel I must tell you that I think this is the most

dreadful mistake, and would be frightful for both you and the child – just think, if you had it adopted you could forget about the whole business in six months and carry on exactly where you left off. That would be much better for you, don't you think? . . . . . It would be bad enough for you but it would be far, far worse for the child. Through no fault of its own it would have to have the slur of illegetimacy all its life, and I can't tell you how odiously cruel and vicious children can be to each other, once they get hold of something like that. A baby isn't just something you can have just because you feel you ought. Because you oughtn't that is that. It's your duty to have it adopted by some couple who really want a child, and who are probably in a far more favourable position for bringing one up. (M, p. 78)

E. C. Roseは，3つの理由で，この手紙を寄こした姉Beatrice を称賛している。第1が，彼女はRosamundのことを非常に良く知っていて，子供を育てるということは，Rosamundの孤独と独立に対する好みに合わないのを知っているということ。第2は，彼女は，Rosamundを愛していて，Rosamundが自分を永久に不幸にしうる決心（子供を自分で育てるということ）をしないよう，できる限りのことをしてやりたいと願っているということ。第3が，彼女は“A baby isn't just something you can have just because you feel you ought.”「赤ちゃんはあなたが生むべきだと思っているという理由だけで生むことができるものではない。」と言って，Rosamund の決心の結果，子供が不幸な人生を送るべきではないと思っていること。そして，姉の手紙に反発して，子供を自分で育てることを堅く決意するRosamund を，“consideration of the child's welfare plays almost no role in her decision to have it and keep it.”[5]「子供を生んで育てようという彼女の決意のうちには，子供の幸福に対する考慮がほとんど何らの役割も果たしていない。」とE. C. Rose は批判する。なるほど，この引用部分だけから判断すれば，Beatrice は，分別のある，妹を愛する，妹思いの姉ということになるかもしれない。しかし，作品全体を読みわたした時，彼女は必ずしも肯定的な人物として描かれているとは思えないのだ。彼女にしろ，Rosamundの両親にしろ，因襲と保守観念に縛

られた，階級意識（ここでは中産階級）の権化のごとく描かれているのだ。そのことは，姉が，自分の２人の子供たちに，労働者階級の娘と遊ぶのを禁じる出来事によって端的に示されている。自分の家の門のところで２人の息子NicholasとAlexandraが，上流階級の家に仕える奉公人の娘Sandra と遊んでいるのを見たBeatriceは，息子たちを引き離し，まるで犬か猫でも相手にしているような乱暴な口のきき方で，その娘に「帰れ。」とどなりつけるのだった。やがて，その娘は猛烈に泣きわめき始めたのだが，さらにそれに追いうちをかけるように，彼女は，「帰れ。」とどなりつけ，娘を追い払うのだった。

姉の，このような人格から判断した場合，手紙の中における，“if you had it adopted you could forget about the whole business in six months and carry on exactly where you left off”「養子に出せば，半年後にはきれいさっぱり忘れて，まったく元通りの生活にもどれるのです。」という忠告が，妹への愛を示していると言えるだろうか。結局は，妹に私生児などがいるがために，自分の名誉が傷つくことを恐れての保身のための忠告ではないだろうか。それに，手紙の最後の方で，“I wish I could come and give you a hand, but I'm so tired at the moment, and they've all got frightful colds.”（M，p. 79）「出かけて行って力になってあげたいと思うのですが，今のわたしはひどく疲れているし，家中みんなひどい風邪をひいているのです。」などと述べており，これは厄介な事に巻き込まれるのが嫌なための逃げ口上ではないだろうか。したがって，Rosamundが，姉の手紙に反発し，子供を自分で育てる決意を堅めるのは，わが子に対して限りない愛情を注いでいるからと言えよう。姉の手紙に対するRosamundの反応は次の通りである。

Her letter did in fact serve one purpose: it revealed to me the depth of my determination to keep the baby. The determination at this stage cannot have been based, as it later was, on love, for I felt no love and little hope of feeling it: it was based rather on an extraordinary confidence in myself, in a conviction, quite irrational, that no adoptive parents could ever be as excellent as I myself would be. （M, p. 79.）

この段階では，赤ちゃんを育てようという彼女の決意は愛に基づくものでは

なかったと言っている。しかし，“as it later was”とある通り，彼女はわが子を愛していることには変わりがないのだ。また，「どんな養父母も決してわたしほどすぐれているはずがない。」という彼女の確信も，「まったく筋が通らない確信」とここでは言っているものの，やはり，わが子を心の底から愛しているがゆえの確信ではないだろうか。さらに，Octaviaが風邪をこじらせて，肺の病気を併発し，手術を受けなければならなくなった時，Rosamundは，“Perhaps I was obliged to make up for what Octavia lacked in quantity of mourners by the quality of my caring.”(M, p. 125)「悲しんでくれる人の数が少ないオクティヴィアの不幸は，わたしの愛の深さで埋めあわせてやらなくてはならないのかもしれない。」と，わが子への愛の深さを表現している。そして，Rosamundの，Octaviaに対する心の底からの愛情をなによりも示しているのが，彼女が，クリスマスの前夜，Georgeと偶然，薬局で再会し，彼を家へ招き，Octaviaを紹介するシーンである。

'She's beautiful,' said George.

'Yes, isn't she?' I said.

But it was these words of apparent agreement that measured our hopeless distance, for he had spoken for my sake and I because it was the truth. Love had isolated me more securely than fear, habit or indifference. There was one thing in the world that I knew about, and that one thing was Octavia. I had lost the taste for half-knowledge. George, I could see, knew nothing with such certainty. (M, p. 172)

彼女の家でのこの場面，すなわち，結局，RosamundはGeorgeに，彼が子供の父親だという事実を告げないこと，は“communication, communion(交わり)，love”に対するRosamund側のあきらめであるとE. C. Roseは主張する。さらに，“he had spoken for my sake and I because it was the truth”ということから，Georgeの“She's beautiful.”というのは，Rosamundへの厚意から言われたがゆえに，愛情表現であるのに対し，彼女の“Yes, isn't she?”という同意は，愛情表現ではなく，ただ単なる事実の表現である，したがってRosamundはOctaviaを愛していない，ともE. C. Roseは主張する。しかし，Rosamundの，「わたしにはこの世でひとつだけわかっているものがあ

った。それはオクティヴィアだった。わたしは，中途半端な知識に対する興味が消え失せていた。ジョージには何ひとつそれほど確実にわかっているものはない，わたしにはそれがわかった。」という感情は，Octaviaに対する愛の深さと，Georgeに対するあきらめの気持ちを表現している。また，Rosamundは次のようにも言っている。

It was no longer in me to feel for anyone what I felt for my child; compared with the perplexed fitful illuminations of George, Octavia shone there with a faint, constant and pearly brightness quite strong enough to eclipse any more garish future blaze.
(M, p. 172)

これは，彼女の，Georgeに対する愛よりも，Octaviaに対する愛の方がどれだけ深いかを端的に表現するものであり，したがって，彼女の“Yes, isn't she?”という同意は，ただ単なる事実の表現であると同時に，Georgeに対するあきらめの気持ちから発せられたものである。

N. S. Hardinは，“As a result of Rosamund's commitment to her pregnancy and subsequently to Octavia, she achieves a true synthesis both within herself and with the outside world.”(6)「ロザマンドの，妊娠，それに続くオクティヴィアとのかかわり合いの結果，彼女は，彼女の内面と外部世界両方との真の融合を成し遂げる。」と述べ，Octaviaの出産，養育を通じて，Rosamundは外部世界との関係を変えてゆき，内部世界，すなわち彼女の人間性を伸ばしてゆくと主張する。これが一般的な解釈であろう。それに対し，E. C. Roseは，“she does not even love Octavia except as an extension of herself, being a mother does not link her with the outside world.”(7)「彼女は，自分の分身としてしかオクティヴィアを愛しておらず，母親になることが彼女を外部世界と結びつけるものではない。」と反論する。Rosamundの外部世界とのかかわり合いという点に関して，N, S. HardinとE. C. Roseの観点は違っている。Rosamundが，妊娠，出産を通じて世間一般との接触を余儀なくされるというのは，作品の中に文字通り描かれた事実であり，N. S. Hardinはそのことを指して言っているのだ。それに対して，E. C. Roseは，RosamundとGeorgeだけの関係を取り上げている。彼女が，彼に真実を

告げないのは，あくまで，Georgeだけとの“communication, communion, love”に対するあきらめであって，決して世間一般とのそれらに対するあきらめではない。

ここまで筆者は，E. C. Roseの批評に反論のみを加えてきたが，彼女の批評に興味を抱いて，*The Millstone*を読み直してみる気になったのは確かで，再読後は，最初に読んだ時に感じた，そして多くの読者が感じているであろう，「フェミニスト小説」という印象はぬぐい去らねばならなかった。Virginia K. Beardsは，“Rosamund successfully defines herself in relation to values other than the male-superiority/female-dependency ones of patriarchy.”(8)「ロザマンドは，男性優位，女性依存という男性中心社会の価値観以外の価値観によって，見事に自分を位置づけている。」と述べ，この作品は，Drabbleのフェミニスト意識の成長を示唆していると主張する。確かに，妊娠，出産を通じて，Rosamundは外部世界との接触を持つようになるという点においては，「成長」したと言えるかもしれない。しかし，Georgeに真実を告げず，自分ひとりで子供を育ててゆく決意をしたということで，彼女は，男性優位，女性依存型の社会価値以外の価値観のうちに身を置いたと言えるだろうか。彼女の決意は，ただ単に，Georgeに対する愛の喪失が原因であって，男性などに頼らず，女手ひとつで子供を育ててゆくんだという，男性社会に対する反抗意識の表われであるとは思えない。

E. C. Roseは，Virginia K. Beardsの主張に反論して，“Rosamund is no feminist heroine.”(9)と述べているが，彼女とは違った理由で，筆者も，Rosamundはフェミニストのヒロインではないと思うのである。Nancy S. Hardinが言うように，彼女は，学者としては“competent and self-reliant”であるが，しかし，ひとりの女性としては必ずしもそうではない。彼女は自分でもそのことを認めている。たとえば，ホテルへ入っても性行為抜きで愛し合っていたHamishと別れた時の状況を次のように述べている。

I was successful in my work, so I suppose other successes were too much to hope for. I can remember Hamish well enough: though I cannot now quite recollect the events of our parting. It happened, that is all. Anyway, it is of no interest, except as an example of my incompetence, both practical and emotional. My attempts at

anything other than my work have always been abortive. (M, p.7)

すなわち，彼女は，仕事以外においては何ひとつ成功を修めることができなかったと述べているのである。そして，作品の冒頭で，彼女が，“My career has always been marked by a atrange mixture of confidence and cowardice: almost, one might say, made by it.”（M, p. 5.）「わたしのこれまでの人生をみると，いつでも，へんに自信と臆病心が裏表になっていたことがわかる。それだけがわたしの人生だったとさえ言えるのだ。」と述べている通り，彼女は，自信家であると同時に臆病な人間でもある。彼女は，Georgeとの性行為において変に強がりを見せる。

. . . he seemed to know quite well what he was doing: but then of cource so did I *seem* to know, and I didn't However, I managed to smile bravely, in order not to give offence, despite considerable pain, and I hoped that the true state of affairs would not become obvious. （M, p. 30.）

相手を怒らせないために，相当の痛さにもかかわらず，勇敢にほほえもうとし，ほんとうの事態があいまいになることを望んだというのは，自分の臆病さをひた隠しにしようとする強がりの態度である。後に，大英博物館で勉強中に妊娠に気づいた彼女は，これでGeorgeに会う口実ができたといったんは考えるのだが，午後になると，

Later that afternoon I realized that I was going to see George now less than ever. It took some time for the full complexity of the situation to sink in. When I realized the implications of my deceit, it became apparent that I was going to have to keep the whole thing to myself. （M, p. 34.）

と気持ちが変わるのだった。「自分を欺いていることの意味が分かってくると，すべてを自分ひとりの胸に秘めておかなくてはならないことがはっきりしてきた。」という彼女の思いは，Georgeに会うことの恐怖心をもことばの背後に表

わしてはいないだろうか。そして，手術を受けたOctaviaとの面会を拒否された彼女が，婦長や看護婦たちと押し問答を繰り返したあげく，自分をすっかり取り乱して，泣きわめく場面がある。

I screamed very loudly, shutting my eyes to do it, and listening in amazement to the deafening shindy that filled my head. Once I had started, I could not stop; I stood there, motionless, screaming, whilst they shook me and yelled at me and told me that I was upsetting everybody in earshot. 'I don't care,' I yelled, finding words for my inarticulate passion, 'I don't care, I don't care, I don't care about anyone, I don't care, I don't care, I don't care.' (M, p. 134.)

Rosamundの弱く，臆病な部分を示すエピソードである。さらに，彼女が，クリスマスの前夜，偶然，Georgeに出くわした時の衝撃が次のように述べられている。

For so long now I had not seen him that I was bereft of all power, so great was my amazement, so many my thoughts, so troubled my heart. I sat there, dumb, and looked at him, and my mouth smiled, for I was terrified that he would go once more and leave me, that he was on his way elsewhere, that he would not wish to stop. I wanted to detain him: I wanted to say, stay with me, but my mouth was so dry I could not speak. (M, p. 162.)

もし，Rosamundがフェミニストのヒロインであれば，迷いを克服して，Georgeを捜し出し，彼に真実を告げたうえで，彼と訣別するだろう。しかし，実際には，彼女はGeorgeに会おうか，会うまいかと悩み，偶然出会うと，上述の引用のように気が動転してしまう。

以上のように，Rosamundは，自信家であると同時に，臆病であり，女としての弱い部分を見せている。したがって，E. C. Roseとは違った理由で，筆者は，Rosamundは必ずしもフェミニストではないと思うのである。そして，Rosamundの未来はどうなるのだろうか，と読者に考えさせるような結末を

Drabbleは設定している。Rosamundにしても，処女作*A Summer Bird-Cage*（1963）の，姉との確執を乗り込えるSarah Bennettにしても，*Jerusalem the Golden*（1967）の，因襲に縛られた故郷の田舎町から都会へ逃げ出すClara Maughamにしても，女性として成長できるかどうかは彼女たちの今後の生き方にかかっているとDrabbleは示唆しているのではないだろうか。最新作*The Middle Ground*（1980）のヒロイン，Kate Armstrongが結末で，“Anything is possible, it is all undecided. Everything or nothing. It is all in the future.”[10]「何もが可能だ，すべてが決まっていない。すべてか無か，どちらかだ。それはすべて未来にかかっている。」と語っているようにである。

Drabbleは，1980年11月，日本で行った講演のうちで，*The Millstone*について述べている。内容はだいたい次の通りだ。

当時，アメリカのある精神分析学者が，彼女に，この作品に関する論文を送ってきた。Rosamund Staceyの性格を分析したその論文は，自分が作品に与えた解釈とはまったく異なるものだった。Drabbleはつのる恐怖と驚きでこの論文を読み，その精神分析学者の解釈が正しくて，自分の解釈がまちがっているということもありえるんじゃないかとさえ思った。その精神分析学者の意見というのは，Rosamundはまったく自己本位で，赤ちゃんを支配したいという欲求に作品の最初から最後までかかれており，彼女は臆病どころか，横柄で，自己本位で，強くて，冷酷で，赤ちゃんとの関係はまったく良いものではないということだった。この精神分析学者がE. C. Roseのことであるかどうかは定かではない。しかし，彼女の批評書がアメリカで発行されたのが1980年で，Drabbleがこの精神分析学者のことを“she”で呼んでいることからして，ひょっとしたらE. C. Roseのことかもしれない。そして，この精神分析学者の意見について，Drabbleは次のように述べている。

Now this is *The Millstone* aspect in yet another light and I find it very, vevy disturbing when interpretations like that are presented to me. They may be right. How should one know the depths of one's own motivation in writing at all?[11]

彼女の解釈が正しいこともありうると言っているのだ。このように多様な解釈が生まれる*The Millstone*という作品は，ひとりの女性の生き方を描いた興味深い作品と言えよう。

注

(1) Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures* (London: Macmillan, 1980), p. 21.

(2) 以後，*The Millstone*は'M'という省略形を用いる。

(3) Hancy S. Hardin, "Drabble's *The Millstone*: A Fable for Our Times," *Critique*, Vol. 15, No. 1 (1973), p. 24.

(4) E. C. Rose, p. 17.

(5) Ibid., p. 22.

(6) N. S. Hardin, p. 25.

(7) E. C. Rose, p. 21.

(8) Virginia K. Beards, "Margaret Drabble: Novels of a Cautious Feminist," *Critique*, Vol. 15, No. 1 (1973), p. 40.

(9) E. C. Rose, p. 21.

(10) Margaret Drabble, *The Middle Ground* (Harmondsworth: Penguin, 1982), p. 270.

(11) Margaret Drabble, "The Search for a Future," *The Tradition of Women's Fiction: Lectures in Japan*, ed. by Yukako Suga (Tokyo: Oxford Univ. Press, 1982), p. 92.